

史跡慈照寺(銀閣寺)旧境内発掘調査現地説明会資料

2008年1月21日

慈照寺・財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所在地：京都市左京区銀閣寺町二番地慈照寺(銀閣寺)境内

調査期間：2007年11月12日～継続中

調査面積：220㎡

調査機関：財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

はじめに

この調査は、研修道場建設工事に伴う、史跡慈照寺(銀閣寺)旧境内の埋蔵文化財確認調査です。

室町幕府第8代将軍の足利義政は、将軍職を辞した後の1482年(文明14)、この地に山荘「東山殿」を造営しました。義政は1490年(延徳2)にこの地で病没し、東山殿は遺命により禅院に改められ慈照寺となりました。慈照寺は、室町幕府の衰退や戦災などにより16世紀には荒廃が進みますが、1614年(慶長19)に徳川家康などの援助により、復興されました。現在の境内の景観はこの頃に整えられたものと考えられています。現在の境内には東山殿時代の遺構である銀閣(観音殿)と東求堂が残されていますが、両建物は江戸時代の復興期に場所を移されているとの説もあり、造営当初の東山殿の景観はよく分かっていません。したがって、発掘調査で得た資料が解明の重要な手掛かりとなります。

今回の調査地は、東山殿・慈照寺の主要な建物があった区域の北側の裏手にあたります。ここに1区～3区の3箇所を調査区を設け、調査を行いました。

調査成果

今回の調査では、2区で石垣とそれに取り付く石組溝、1区と3区では堤状の遺構が見つかりました。これらはいずれも東山殿時代(室町時代後期)の構築物と考えられます。

(1)石垣・石組溝

直角に曲がる石組溝とその片側の肩口に構築された石垣を検出しました。南面は東西、西面は南北方向に正確に配置されています。いずれも花崗岩の自然石と割石を用いています。石組溝には長軸長30～100cmの石材が用いられており、幅約80cm、深さ約100cmあります。遺構の保存のため、溝の中の土を掘り切らずに残しています。石垣には長軸長が60～100cmの花崗岩の石材が用いられています。高さにして約60cmの最下部の一行のみを残し、それより上の石は16世紀代の土砂崩れや洪水によって崩落しています。当初の姿を再現すると高さは120cm程度あったものと思われます。石垣と石組溝に用いられている石材の中には、矢割を施した際の楔状の痕跡が残る石材があります。これらの遺構は、石組溝の埋土から出土した土器の型式から15世紀後半(室町時代後期)に作られたものと考えられます。

(2)堤状遺構

1区の2箇所と3区の計3箇所で、堤状遺構を検出しています。基底部の幅250～300cm、高さ80～100cmあり、復元すると30m以上にわたって、正確に東西方向に延びています。堤状遺構の盛土から出土した土器の型式や地層の状況から、15世紀後半(室町時代後期)に構築された遺構と考えられます。堤状遺構の北側には石垣を壊した洪水の砂層が全面的に広がっていますが、南側には洪水砂層は及んでいません。調査区の南側にあった東山殿や慈照寺の主要な建物を、洪水や流入砂の被害から守る役割をもった遺構と考えられます。また、石垣と堤状遺構の間の空間は、砂溜まりや遊水地状の空閑地となっていたようです。

(3)その他の遺構

石垣が崩落埋没した後、16世紀後半(桃山時代)ごろに作られた石組みの暗渠溝を見つけています。また、1区の南側では江戸時代の3時期にわたる東西方向の溝群を見つけています。

おわりに

今回の調査では、東山殿・慈照寺の主要施設の北側の景観を明らかにすることができました。この場所には、建物や庭園などはありませんでしたが、東西・南北方向に軸をとる立派な石垣が見つかりました。室町時代の石垣は類例に乏しく、非常に貴重な資料です。また、この石垣によって、北東の山中に何らかの施設が存在したことを推測することができます。また、調査地付近は、水害とそれに伴う流入砂の被害から南側に広がる東山殿・慈照寺の主要な建物や庭園を守るための防災施設が作られていることが明らかとなりました。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所ホームページ <http://www.kyoto-arc.or.jp/>



写真1 2区 石垣全景(西から)



写真2 3区堤状遺構(北から)

